

発行所(郵便番号100)  
東京都千代田区丸の内2-4-1  
丸の内ビルディング617号室  
社団法人スウェーデン社会研究所  
Tel (3212) 4007・1480  
Fax (3212) 1447  
編集責任者 岡 沢 憲 美  
印刷所 関東図書株式会社  
定価200円(年間購読料参千円)  
1991年11月25日発行  
第23巻 第11号  
(毎月1回25日発行)  
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

# スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 23 No.11

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning  
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)  
Marunouchi-Bldg., No.617, Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

## 9年ブリの政権交代：ビルト政権誕生

1991 Election: New Riksdag and New Cabinet

常務理事 早稲田大学教授 岡 沢 憲 美

Prof. Norio Okazawa

九月総選挙は「ビルトかカールソンか」を最大争点として争われたが、国民はカオスを選択したのかもしれない。政権交代劇が演じられたためであろう、日本での報道は過剰反応気味であった。福祉大後退論や福祉ウンザリ論までも提出された。コンセンサス・ポリティクスが定着したこの国では、福祉政策の基本枠組については広範な合意が定着しており、微調整はあっても基本枠組の根底的修正などありえない。国民が既に膨大な掛け金(税金)を国家(強大保険組織)に払い込んでおり、政権交代くらいで既得権を放棄するはずがない。名にし負う高負担社会である、既に払い込んだ税金は簡単に断念するには大きすぎる。EC加入を目指して微調整作業に入ったと評価すべきであろう。

微妙な選挙結果のため政権樹立過程で早くも先行きに不透明感を投げかけるという印象も与えたが、それでも10月4日、ようやく穏健統一党のビルトを首班とする保守・中道連合政権が誕生した。30才で政界入りしてから7年で党首に就任し、12年でローゼンパッド(首相府)の主人公になった新首相は国民の微妙な選択に複雑な心境であろう。

スウェーデンでは社民党と左党で構成される[社会主義ブロック]と、穏健統一党、国民党・自由、中央党で構成される[ブルジョワ・ブロック]の間で政党間競合が展開されてきた。今回はこの伝統的な競合枠が大きく動揺した。ブルジョワ陣営は勝利したとはいえ、議席を伸ばしたのは既成政党では穏健統一党だけであった。政権交代

は既成政党の力で達成されたのではない。前回までは4%条項に阻止されてきたキリスト教民主同盟と誕生間もない新民主党の躍進が社会主義ブロックを敗北に追い込んだのである。既成三党の合計議席は144で過半数にほど遠い。そこで、古くて新しい保守政党であるキ民主同盟が必要となるが、キ民主同盟を入れてもまだ過半数に達しないのである。「数の論理」を強調して新民主党を誘えば過半数を確保できるが、その超保守主義体質を嫌う党があるため、結局は四党連合少数党政権しか選択肢がなかった。新民主党という時限爆弾を抱えた政権運用となる。政策大転換など望めそうもない。

社民党の敗北理由はいくつも指摘できよう。例えば、ソ連・東欧体制の崩壊が、部分的には社民離れを加速したこと(圧倒的な相対多数党を誇る第一党であるという事実は少しの変化もない)。また、東西対立軸が解体して、伝統的な非同盟・中立主義に新しい解釈が可能になったこと。国民の90%以上が「スウェーデンの欧州化」を希望し、EC加盟を支持するようになった。そうなれば、

### 目 次

9年ブリの政権交代：ビルト政権誕生	
.....岡 沢 憲 美	1
スウェーデンでの若者像.....高 橋 一 夫	3
(研究会報告) 報道の自由と倫理	
.....潮 見 憲 三 郎	6
<お知らせ>ストックホルム商科大学日本研究所	
.....	6

「手厚い福祉と恵まれた労働環境をかかえて国際競争力を維持できるか」という保守・財界からのメッセージが説得力を持つことになる。穏健統一党と国民党・自由が選挙前に発表した『スウェーデンの新しい出発』は、超肥大化した公共部門の減量と効率化、税負担の見直し・減税、民営化と

規制緩和の実施、企業負担金の削減、相続税と財産税の緩和、過剰福祉の適正化、を實行して欧州化を急がなければ、国際競争力を維持できないと指摘していた。これが新政権の政策基線となるが、前途は、上に述べたように、どこまでも多難。保守政界の切り札・ビルトの力量が試される。

■ スウェーデン91年議会選挙

		1988選挙	1991選挙
M	穏健統一党	66人	80人
cp	中央党	42	31
F	国民党・自由	44	33
Kds	キ教民主同盟	0	26
	[ブルジョワ・ブロック]	152	170
SAP	社民党	156	138
V	左党	21	16
	[社会主義ブロック]	177	154
Miljo	環境党・緑	20	0
NyD	新民主党	0	25
O	その他	0	0
	[合計]	349	349

■ 第一次ビルト政権 1991—10—04

首相	カール・ビルト	穏健統一党	1949	党首
副首相 兼 社会福祉相	ベクト・ヴェステルベリィ	国民党・自由	1943	党首
財務大臣	アンネ・ヴィブレ	国民党・自由	1943	女性
税金担当相	ポー・ルンドグレン	穏健統一党	1947	
外務大臣	マルガレータ・アフ・ウグラス	穏健統一党	1939	女性
欧州問題担当相	ウルフ・ディンケルスピイル	無党派	1939	
対外援助担当相	アルフ・スヴェンソン	キリ民主同盟	1938	党首
司法大臣	グン・ヘルスヴィク	穏健統一党	1942	女性
法律顧問	レイダム・ロウレン	無党派	1931	女性
防衛大臣	アンダーシュ・ビョルク	穏健統一党	1944	
運輸・通信相	マツ・オデル	キリ民主同盟	1947	
教育大臣	ベール・ウンケル	穏健統一党	1948	
学校問題担当相	ベアトリス・アスク	穏健統一党	1956	女性
農業大臣	カール・エーリック・オルソン	中央党	1938	
産業大臣 兼 エネルギー担当	ベール・ヴェステルベリィ	穏健統一党	1951	
労働市場大臣	ベルエ・ヘルンランド	中央党	1935	
文化・移民大臣				
兼 機会均等相				
兼 住宅相	ビルジット・フリゲボ	国民党・自由	1941	女性
病院問題担当相	ポー・ケーンベリィ	国民党・自由	1945	
教会大臣	インゲル・ダヴィドソン	キリ民主同盟	1944	女性
環境・資源大臣	ウーロフ・ヨーハンソン	中央党	1937	党首
環境副大臣	ヨーレル・ツルディン	中央党	1942	女性

# スウェーデンでの若者像

Young people in Sweden

会 員 東京都立第二商業高等学校教諭 高橋 一 夫

Mr. Kazuo Takahashi

去る7月21日から8月16日まで、2度目のウプサラ大学インターナショナル夏季講習会に参加した。参加した講座は前回同様のスウェーデン語初級と初めてのスウェーデン史であった。スウェーデン語は、4年前に受講した内容をすっかり忘れたため、再度の挑戦にした。幸いなことに教科書も指導法もまったく違っていたため成果は良かった。午後のスウェーデン史コースは、フィールドワークを取り入れた楽しい授業となった。

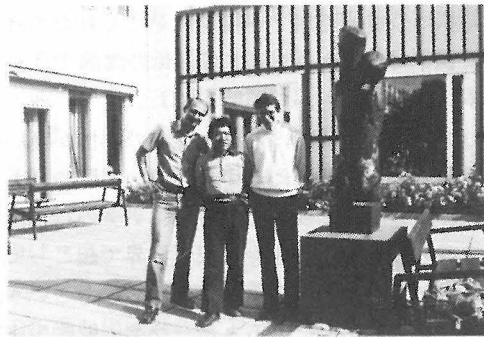
4年前と比較すると参加国や年齢構成の点で少々異なっていた。前回はかなり発展途上の国々が多かったが、今回はスイスや東欧諸国の青年たちが目立った。年齢構成もより若い人々が多いようであった。

前回は、仕事の都合で3日ほど遅れ、オリエンテーションも経ずに参加したためいろいろと戸惑うこともおこった。しかし、今回は開講前日に着いたため、余裕をもって参加することができた。夏季講習会のあとは、3日間のマルメ旅行を除いて、すべてウプサラ市の図書館を中心として行動した。目的の第一は、前回見学できなかった市内のジムナジウムを訪れ授業の様子やカリキュラムを説明していただくことであった。第二の目的は、講義の合間に調べることのできなかったウィクセル資料をヒューマニティセンターや市立図書館で探すことであった。3度目のスウェーデン旅行ということもあって、ストックホルムやウプサラ市内をあくせくと見学で貴重な時間を費やす必要もなかった。見るものがすべて珍しいという表層的なものから、より内容的なものに関心が深まった。資料収集もある程度じっくりと腰をすえて、読む時間をもてた。大学付属図書館カロリーナ・レデビーバでは、とりあえず文献目録のメモだけをし、次回の楽しみとして残しておいた。

8月30日モスクワ経由で帰国した。往復ともソビエトについてはクーデターや盗難そしてサービスの悪さなどあまり良い思い出には出会わなかった。

40日間という短い期間であったが、いちばん楽

しい思い出そして勉強になったことは、若い人々との話し合いであった。彼らの話しは必ずしもスウェーデンの社会を代表するものでもなく、またすべての確にスウェーデン社会を表現しているわけではない。しかし、いつの時代も若者たちの感覚は貴重なものであるし、問題提起のリトマス試験紙ともなってきた。その意味で2、3のエピソードを述べてみたい。



机を並べた青年達と

私とスウェーデン語で机を並べた青年の中に、ポーランドからきたイエルジとルクセンブルグのマルコがいた。

イエルジがこの講習会に参加した理由は、バルト海をはさみ、最も近くそして海外の知識を得ることができるのが、スウェーデンであるという。アメリカや日本では、遠く、費用が掛かりすぎるという。特に午後のコースはスウェーデン映画を選んだ。映画にはかなり関心をもっており、週数回夜に開催されるビデオフィルムの時間は欠かさず出席していたようである。また、あるとき映画監督の講演のあと、わざわざロケ現場を訪ねてストックホルムまで行ったこともあった。将来映画に携わる仕事をしたいと云っていた。ポーランドの大学生の就職状況は決して良くない。しかし、自分に対しても社会に対しても楽観視していると。スウェーデンについては憧れてきたわけでもないが、ひとつのモデル国家として勉強になっていると。

私はスウェーデン映画といえば美貌のイングリ

ットバグマンと名監督ベルイマンくらいしか思い浮かばなかった。彼らの影響でビデオフィルムによるスウェーデンの名画を見、名監督を招いた講演に出席するようになった。そのなかでラウル・ワーレンベリィ (Raoul Wallenberg) の第二次大戦中のブタペストでの活躍を映画化した Kjell Grede (シェル・グレーデ) の「Goafton Herr Wallenberg」は、強烈な印象を受けた。ワーレンベリィが、第二次大戦中ブタペストの外交官としてナチの迫害からユダヤ人を守るため、アイヒマンやハンガリーファシストと戦う映画であった。映画は彼がソヴェトに連行されるシーンであった。またナチの残虐なシーンの描写には嘔吐さえ感じた。ハンガリーナチについて説明してくれたのはマルコであった。この件でスウェーデン人が持つ複雑な対ソ感情を教えてくれたのはイエルジィであった。Kjell Gredeの講演ではかなり多くの若者たちから質問がでた。ただ、西ドイツの青年からの質問はなく、彼らの心情が痛いほど理解できた。監督に対する面白い質問や厳しい質問の中で印象に残った回答は、ナチの行為は決して過去のものではなく現在も世界で起こっていると。ベトナム戦争も湾岸戦争もしかりという。イエルジィの話によるとポーランド映画の中にも反ナチの厳しいものが多いという。

当時のワーレンベリィの苦悩は、まさしく第二次大戦中のスウェーデンの苦悩でもあった。理想と現実の狭間でいかに生きなければならないかである。講習会終了後、スウェデッシュインステテートでワーレンベリィの資料を購入した。スウェーデン外務省もしばしばこの件では対ソ交渉を続けてきた。20,000ページ以上に亘る公文書と3,000以上にも亘る関係者の調査結果を公表している。ソヴェト連行後の彼の運命については不確かなままであり、最近においては前カールソン首相によってもこの問題が提起されている。現在進行中のソヴェト変革の中で新しい事実が出てくるように思える。

イエルジィの話では、東ヨーロッパでのスウェーデン映画の評価はかなり高いという。2、3の興味程度であったスウェーデン映画が、スウェーデンについてより深い知識と関心を持つ機会となった。

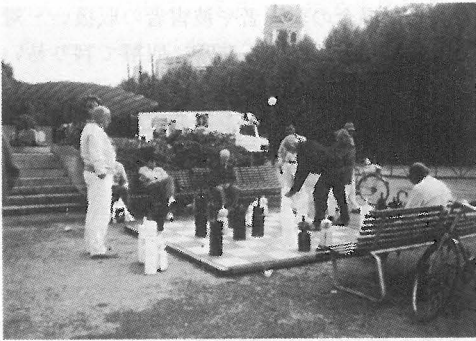
ウプサラ大の寮生活のあとは、ユースホステル

に泊まることにした。申し込みをするとき、市街地から6キロ離れたスウンナーサットまでジョギングでいった。市街地をでると、道路は松林や荒地の中を一直線に延びていた。初めて走るスウェーデンの自然に、すっかり気分が爽快になった。日本と違って湿度がないため流れ出る汗も膚にべとつかない。にわか雨が多い国だが、今回は意外に少なかった。日本の秋のようにすっきりとした青空、ひんやりとした空気の中をいつもより少し速いペースで走り続けた。松林を過ぎたところで、3人の中学生に出合った。事故防止の黄色いチョッキを着て、細長い棒で空缶やゴミを回収していた。簡単な英語で話し掛けてみるとどうにか意思疎通ができた。郊外でのゴミや空缶の回収は、時給80クローネになるという。友達と話しながら、このようなアルバイトができることは、楽しいと言っている。まだあまり入っていない黒のビニール袋を引きずりながら、棒の先でゴミを挟んでは入れていく。頑張っってねと励ましたあとまた走り続けた。大学の寮からは、10キロ位あったようで約1時間かかった。帰りはバスにした。市街地に入ったフェリス河沿いでバスを降りるとまたゴミ回収をしている高校生に出合った。スウェーデンの良いところは、青少年たちに英語が通じることであった。先程の中学生と違って少し詳しく事情を聞くことができた。3年制のエコノミックスラインと2年制のクラリカルラインで学んでいるという。中学時代からの友達で、2人で市の方に申し込んだという。市内での空缶やゴミ拾いは、時給50クローネでちょっとしたアルバイトより良い条件だとのこと。確かに友達と話し合いながら晴れた日に、あまり交通量の多くないところで小さなゴミの回収行為は、楽しいに違いない。多少の費用が掛かっても青少年たちに環境問題を考えさせる機会ともなるだろう。ここでもスウェーデンの教育がなにを重視しているかが理解できた。

最後の夜はストックホルムで過ごした。ウプサラのユースホステルは駅からかなり離れているため、空港到着の諸手続きや土産の購入などの時間が気懸かりであった。またストックホルムのバスターミナルからアルランダ空港に行ったこともなかった。ストックホルム駅で一夜明かして早朝一番で出発することにした。しかし、計画は甘かった。12時過ぎには警官か保安官らしき人がきて追

い出しが始まった。12時30分のウブサラ行を最後に全員駅外に出された。不幸にして小銭以外はすべてスーツケースに入れてバスターミナルのコインロッカーに預けてしまった。気づいたときはバスターミナルの通路は締まっていた。小銭しか持たないストックホルムの一夜がはじまった。

まずクングストレゴーデンで時間を潰してみようと考えた。公園の近くには数件のディスコがあり、すぐ近くの市の中心地でタクシーや車を降りてくる青年たちが見かけられた。バンドの音がかなり高く、若者たちは熱狂していた。入口には屈強な青年がいて、ときどき通るパトカーを睨みつけていた。公園を横切る若い男女も午前1時ころとなるとめっきり少なくなった。近くにはNKデパート、スイデッシュインスティテュート、銀行や航空会社などが集まっており、昼間はずっと賑やかなところである。1時も過ぎた頃若い男女



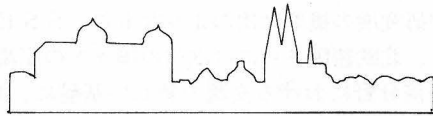
昼のクングストレゴーデン

が清涼飲料を持ってきて公園を通る二人連れに売りつけていた。この時刻は若者たちにとっては、一日の最後の楽しみの時間なのかもしれない。しかし、2時を過ぎると人通りも絶え、路上の清掃に清掃用のロータリー車があらわれる。近くのセルゲール広場やその地下街もすっかり清掃されて散水される。ストックホルムの朝化粧はこの時刻に終わるようである。朝の4時ころとなると気温がすっかり下がり、ビル壁の温度計は0度を示していた。8月29日、日本ではまだ蒸し暑い日が続いているところでもある。店もまったく開いてなく暖をとるため、たった1軒の駅前のマクドナルドに入った。1杯のコーヒーや1個のハンバーグで寒さから逃れて集まっている若者たちが多かった。とくに、中近東やアフリカ系の若者たちが集まっていた。しきりに店長が海外労働者と思われる店員に彼らを追い出すことを指示していた。コー

ヒーで暖をとったあとまた朝方のストックホルムの街を歩き始めた。あと数十分。駅の周りにはワングル姿の若者たち、そして毛布もなくただ壁に身を寄せて寒さを凌いでいる若者たちもいた。厳寒のときは、これらの若者たちはどこで暖をとるのだろうか。5時になるとキルナ方面からの一番電車が入線した。駅前の車の交通量も次第に増えてきた。ストックホルムの一日が始まったのであった。

滞在中に多くの若者たちとEC問題、福祉問題、経済成長、移民問題そして教育問題などを話す機会がしばしばあった。しかし、その論点の中核は、スウェーデン経済の鈍化への懸念であり、伝統的なスウェーデン的な物の考えかたがどのように若い人々に受け入れられていくかということになる。あるアメリカの青年が、社会福祉問題の講演のとき、きっぱりと言い切った言葉が印象に強く残った。「最近スウェーデンについて議論するとき、マネー、マネーというが、マネーが価値のすべてだろうか。わたしたちがスウェーデンに求めているのはマネーとは異なる価値だ。」

次の世代を担う若者たちが経済以外のもうひとつの重要な価値がスウェーデンにはあることを強調していた。短い滞在であったが多くの青年たちから素晴らしい思索のプレゼントを頂いて帰国した。



## 報道の自由と倫理の研究会

講師 潮見憲三郎先生

10月15日潮見憲三郎先生を講師に迎え当研究所にて研究会が開催された。

演題は『報道と名誉・プライバシー スウェーデンではどう制御しているか、アメリカ・日本では』。報道の自由と倫理、扱われる事件の渦中の人物のプライバシーと社会との関係について、およそ2時間に亘り講演して頂いた。

内容は次の3つに大きく分けられる。

まず、この問題を理解するための基本的要件を自由社会でのマス・メディアの特徴をプライバシーとの関連に中心に置き、特に、メディアと一般の商品との大きな違い、書く側からの商品＝記事を取り上げる選択基準、書かれる立場と読む立場の位置と関係や、これらの包括的問題点などについて図解と凡例を用いながら説明がなされた。

次に、行政レベルの役割と機能について、スウェーデンのプレスオンブズマンを中心に日本やアメリカとの比較も併せて検討が行われた。中でもオンブズマンの機能の様子を最近の統計から実際に件数を例に見ながら、その処理の流れを判り易く示された。

そして最後は、本日のテーマであるプライバシーと人権の問題をわが国の現状とも絡めながら、人権の問題の核心に触れ、特に何某かの犯罪や事件が発生した場合の容疑者や被害者の取扱い・対応につき、民間と行政両面から鮮やかに各国の特徴を捕らえることができ、非常に明解で判り易い内容であった。

全体の印象として、人権の尊重や侵害に関し、マスメディアの及ぼす影響を十分に考慮にいれながら、受け手である我々の立場や意識の在り方の再検討、さらには国民的なコンセンサスの深まりの必要など、種々の問題提起に富んだ意義深い研究会であった。 (伊藤)

### <お知らせ>

「ストックホルム商科大学 (SSE) 日本研究所」設立募金委員会の主催による  
アカデミック・フォーラムが10月22日にスウェーデン大使館にて開催

スウェーデンを代表する名門のストックホルム商科大学に日本研究所を設立するキャンペーンのため学長のスタファン・ブレンスタム＝リンデル博士とオリアン・セルベル教授が来日された。スウェーデン大使館にてヘイマン大使も臨席され、スウェーデンの政治・経済情勢を語り合うアカデミック・フォーラムが読売新聞の協賛により開催された。

このフォーラムにおいて、リンデル学長は先ず、東西冷戦崩壊後の新しいヨーロッパにおけるスウェーデンのメリットに触れ、次にヨーロッパ及びスウェーデンにおける日本研究への意欲とその現状について、そして、今回のメインテーマであるSSEにおける日本研究所設立のたいなる意義についてアピールされた。

この研究所の概要は次のようなもの。SSEの国際化された機構を十分に活用し、日瑞の交流は勿論のこと、北欧諸国さらには欧州の国々との交流促進とネットワークの構築を目指すものであり、ビジネス・経済分野における交流の新しい基盤に、日本研究を核とした国際的な学術交流を深めるためのユニークな接点としての役割を狙いとして計画されている。

ストックホルム商科大学 (SSE) 日本研究所は、今後の日瑞の新しい架け橋として各方面からもその発展に非常に大きな期待が寄せられている。

事業計画、募金その他日本研究所に関しては下記までお尋ね下さい。

ストックホルム商科大学日本研究所設立募金委員会

(委員長：大来佐武郎、委員：服部禮次郎 ほか)

問合せ先：和光 秘書室 担当 鶴浦 (うのうら)

TEL 03-3562-2111 ex 2401